

氏名	木内 英実
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第 187 号
学位授与年月日	2015（平成 27）年 9 月 13 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	中勘助インド三部作研究—印度学・仏教学の受容を中心に—
論文審査委員	主査 山口俊雄（日本文学専攻 教授） 副査 渡部麻実（日本文学専攻 准教授） 副査 永村 眞（史学専攻 教授） 副査 源 五郎（本学名誉教授） 副査 眞鍋俊照（四国大学教授）

論文の内容の要旨

中勘助（明治 18 年～昭和 40 年）の小説群の中でも、インド三部作^{註 1}と呼ばれる作品群がある。これら作品名と初出は大正 10 年 5 月「提婆達多」（新潮社）、大正 11 年 4 月「犬」（『思想』岩波書店）、昭和 4 年 10 月「菩提樹の蔭」（『思想』岩波書店）であり、8 年間に創作された。

本論文はインド三部作における印度学・仏教学資料の受容の内容を明らかにする試みである。

これまでインド三部作研究の基礎とされてきたのは、インド三部作発表当時の和辻哲郎や小宮豊隆など中勘助と親しい文化人による同時代評を踏襲した作品のテーマや表現についての論考である。特にテーマに関する論では、中勘助の伝記的要素が俎上に載せられ、兄との不和に苦悩する中勘助像が先行イメージとして踏襲されてきた。小説家として中勘助が印度学・仏教学資料を受容し作品に反映させたことは、新潮社版「提婆達多」の巻末に掲載した参考資料、経典 31 種と印度学・仏教学資料 15 冊からも明らかである。そのような資料を受容した経緯の概要は岩波書店版『中勘助全集』第 15 巻（平成 3 年）収録和辻哲郎宛て書簡から確認できるが、その詳細は議論されてこなかった。

しかるに近年、筆者は静岡市所蔵中勘助関係資料の調査の過程^{註 2}において、これらの創作の参考とした印度学・仏教学資料の中に中勘助による書き入れを確認すると共に全集未収録の印度学・仏教学資料受容に関わる書簡や作品改訂途中の草稿を発見することとなった。そこで、本論文は、それらを

用いて、中勘助による印度学・仏教学資料の受容の詳細を検討することにした。

また「銀の匙」(『東京朝日新聞』 前篇大正 2 年・後篇大正 4 年) とインド三部作の発表をもって、小説家中勘助の文壇における地位は固まったといえるが、「銀の匙」発表の経緯やインド三部作構想及び発表、同時代評に関わった人物が漱石門下の友人だったことから、中勘助も漱石山脈の一角であるとの固定化したイメージが出来上がっている。インド三部作を社会的及び歴史的文脈の中に位置づけることにより、作品の方法では漱石の影響下に、またインド三部作から「鳥の物語」に至る思想面では鷗外の影響下にあったことを導き出すことを目指した。

本論文は、第一部において中勘助が文学活動を軌道に乗せた明治末期から大正期を中心に、印度哲学・仏教学を当時の文学者がどのように作品へ取り込んだのか、社会現象としての印度哲学・仏教学資料を典拠とするいくつかの作品について考察した。

第一部第一章では、中勘助の蔵書にもその図書(古書)の存在が認められ「阿育王」構想の原点となったと推測される森鷗外・大村西崖共著、高楠順次郎校閲の「阿育王事蹟」(春陽堂 明治 42 年)について取り上げた。中勘助が印度学・仏教学及びそれらの資料に関する知識を和辻哲郎と宇井伯寿から得ていたことは、第二部掲載の書簡からも明らかであるが、文学者が哲学者等と協働して印度に実在した古代の聖王に関するドイツ語資料をもとに翻訳、考証した作品である。共著者である大村西崖(明治元年～昭和 2 年)は美術史家であり美術評論家。高楠順次郎(慶応 2 年～昭和 20 年)は英国オックスフォード大学で印度学を学び東京帝国大学でサンスクリット語を講じた当代きっての印度学者であった。

中勘助も哲学者・和辻哲郎、高楠の弟子であった印度学者・宇井伯寿との交流の中でインド三部作を創作したことから、鷗外が先駆的な立場にあったことは明らかである。明治末期の戦時下の国家体制と「うた日記」(春陽堂 明治 40 年)の内容から、鷗外による「阿育王事蹟」執筆出版の意図を、軍事態勢への批判、武力国家の精神的基盤の脆弱さの指摘であることを明らかにした。

第一部第二章では、中勘助と同年代の文学者の内、寺族出身であり社会主義に深い関心を寄せていた石川啄木(明治 19 年～同 45 年)は、明治末期に印度学者姉崎嘲風の影響下で印度学・仏教学用語を作品に取り込んで込んでいったことを示した。また社会主義者であった秋田雨雀(明治 16 年～昭和 37 年)の場合、政治的信条とは離れ魂の救済を求める私的事情から印度学・仏教学的な作品を執筆した。個人的思想として印度学や仏教学への関心が高まるような明治末期のインド思想を寺族以外の人も受容した社会状況について明らかにした。

第一部第三章では、啄木同様、寺族出身であり印度学・仏教学に関心を抱き北原白秋門下として作品を執筆した久末淳（明治 25 年～昭和 27 年）を紹介した。受容した印度学・仏教学資料及び作品発表雑誌の傾向から、大正期の文壇が仏教学・印度学的作品を歓迎していた状況を示した。

第二部は中勘助のインド三部作について、創作の参考とした印度学・仏教学資料との比較を行った結果である。

第二部第一章一では、「提婆達多」について、発表当時の日本における印度学の流入の影響下にあったことを、新潮社版「提婆達多」の表紙カバー写真から明らかにした。中勘助の印度学・仏教学の研究者との交流から、耶輸陀羅の提婆達多との不倫や提婆達多の最期の描写など従来解釈から自由となった文学的な仏伝の可能性を同作が切り開いたこと、ドイツ演劇界における数々の仏伝に基づいた脚本が示すように世界の潮流からもそれは自然であったことを示した。

第二部第一章二では、「銀の匙」から「提婆達多」への連続性や発展性について論じた。「往生要集」等源信（恵心僧都）の思想について、上野寛永寺山内真如院と比叡山横川恵心堂への滞在時期に執筆された「銀の匙」前篇十七、同三四、後篇七、同十六、同三十五に影響が窺えた。例えば、それらは「銀の匙」後篇七で表された主人公の厭世観の前提としての「往生要集」における「厭離穢土・欣求浄土」の思想であり、後篇三十五の伯母さんの臨終場面における、天台門の思想「念仏の功德」であることが分かる。特に「往生要集」大文第八「念仏証拠門」の偈文「極重悪人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽」の出典を「観無量寿経」に遡ることによって、「提婆達多」後篇の阿闍多設咄路王の話に至ることから、「往生要集」の「提婆達多」成立に果たした役割は大きいと考えられる。

第二部第二章一では、「犬」の成立をめぐる漱石の「吾輩は猫である」とのプロットの比較から、方法面で影響を受けたことを論じた。

第二部第二章二では、異教徒の人物造型に関し、当時の中勘助が受容した静岡市中勘助関係資料内のインド史書 No.062A015 Vincent A. Smith, *The Early History of India Including Alexander's Campaigns*, 3rd.Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1914、No.067A008 Stanley Lane, *Mediaeval India under Mohammedan Rule*, T. Fisher Unwin Ltd., 1917 よりアレクサンダー大王の東征の影響を認め、インド史上の度重なる異民族侵入の苦難の歴史が作品の展開の端緒にあることを論じた。歴史的著述と文学的著述の間にある差異を、中勘助の文学的特徴と位置づけた。

第二部第二章三では、「犬」の主人公夫婦のモデルを当時の社会的事件に探求した。「インド僧」は大本教主の出口王仁三郎、「百姓娘」は柳原白蓮であるこ

とを当時の新聞記事より解明した。

第二部第三章一では、執筆の契機と関わった人物（江木妙子・山田又吉）を紹介し、静岡市所蔵中勘助関係資料 060A010（元論文執筆当時は資料目録のみ閲覧可能だった中勘助蔵書）Kalidasa, Hermann Camillo Kellner, *Sakuntala Drama in sieben Akten*, Phillipp Reclam, 1890 を中が受容する社会的背景を解説すると共に、代表的な日本語訳「シャクンタラー姫」（辻直四郎訳 岩波文庫 昭和 52 年）と「菩提樹の蔭」とのプロットの比較を行った。また、執筆の動機になった文楽の「生写朝顔話」が「菩提樹の蔭」の女主人公造型に及ぼした影響に触れた。

第二部第三章二では、実際の静岡市所蔵中勘助資料 060A010 の書き入れ箇所を確認し、「菩提樹の蔭」とのプロットの再比較を行った。その中で「菩提樹の蔭」プロットに「シャクンタラー姫」「傾城阿波の鳴門」「生写朝顔話」「ピグマリオン」とインド・日本・ギリシアの物語のエッセンスを組み合わせるという中勘助による創作の試みが認められた。

終章において、インド三部作の構想・執筆経過の過程で、中勘助が受容し、参考とした印度学・仏教学資料の種類の変遷を次のように振り返った。「提婆達多」においては、大蔵経や「往生要集」等経典類、原始仏教に関する解説書を、「犬」においては、インド史資料、最後の「菩提樹の蔭」においては、インド文学を典拠とした。さらに、それらの資料の多くが英文やドイツ語表記の資料であり、鷗外や和辻も高く評価した資料であったことから、購入並びに作品の典拠本として採用する際に中勘助が大切にすることは国際標準であったことを指摘した。具体的にはドイツにおける印度学隆盛と日露戦争を背景に「阿育王事蹟」を著した鷗外と、アレキサンダー大王について論文と小説を発表し、日本・インド・ギリシャ・ペルシャの文化交流に興味を抱いていた和辻の影響として見た。

鷗外の影響を語る上で、中勘助がインド三部作の後、着手した連作「鳥の物語」の形式について着目した。「鳥の物語」第一作「雁の話」（『思想』 昭和 7 年）構想当初は、室町幕府の足利義満の前で鳥が体験談もしくはその種族に伝承される物語を語る形式であった。しかし第二作目「鳩の話」（岩波書店 昭和 16 年）では、チンギスハンの息子でモンゴル帝国第二代皇帝オゴタイの前で語る形式に変化したことは、時局の変化が背景に認められ、中勘助の国家観・戦争観において大きな意味を持つ。ここに鷗外が日露戦争出征を経て、印度学・仏教学資料を受容し「阿育王事蹟」を執筆した思想的影響を認めた。このことから、中勘助の「銀の匙」を世に出す機会をつくった漱石よりも、インド三部作から「鳥の物語」執筆に至る長きに亘り、小説家中勘助の思想に影響を与えたのは、鷗外の国際的視野に基づく思想であったと結論づけた。

注

1 関口宗念『提婆達多』における悪』『中勘助研究』（初出『聖和』3号、昭和36年11月）に「インド三部作」の言葉が初出し、奥山和子『中勘助の思想』（私家版 昭和42年頃）内にも「インド三部作」という言葉が登場する。この呼称は中勘助文学研究において一般化した。

2 静岡市所蔵中勘助関係資料は平成6年に中勘助遺族により寄贈された原稿、蔵書、メモ、書簡を中心とした中勘助遺品約4500点（第一期・第二期の寄贈点数）を示す。平成24年度より筆者は資料調査に関わる中で、インド史資料の調査の過程において、本論登場の書籍を含むインド地方史及びインド地方研究図書合計9冊の内容を調査した。また現在調査は自筆原稿及び校正原稿、小説執筆のための参考図書を中心に行われ、平成27年3月末日までに約80点の資料のデジタル化が終了した。

論文審査結果の要旨

中勘助文学に印度学資料・仏教学資料の受容が見られることは、これまでも和辻哲郎宛書簡ほかから知られていたものの、中勘助研究史および中勘助作品研究史において詳細に議論されることは従来ほとんどなかった。そのような研究状況の中で印度学資料・仏教学資料の受容実態の解明へと着手したこと、そしてその際、静岡市所蔵中勘助関係資料にアクセスし手沢本への書き込み調査から得られる知見を最大限活用したことは非常に高く評価された。

静岡市所蔵中勘助関係資料にアクセスしたことが成果につながった箇所は、具体的には、「提婆達多」を論じた第二部第一章一、二、「犬」を論じた第二部第二章一、二、三および「菩提樹の蔭」を論じた第二部第三章二であり、中勘助が参照した図書の特定にとどまらず、手沢本への書き込みという重要な情報を手がかりにして中勘助がこだわった点に着眼することで作品の主題を改めて確認することにもつながったのは、貴重な達成であると感じられた。

しかも、このことが参考図書について言えるだけでなく、生前の『中勘助全集』への中勘助自身の書き込みからインド三部作読解に関わる重要な示唆を拾い出している点も特筆すべき達成であると思われた。

また、静岡市所蔵中勘助関係資料への着目だけでなく、中勘助の文楽への関心表明を手がかりに、「菩提樹の蔭」への「生写朝顔話」「傾城阿波鳴門」からの影響を指摘したことも重要な成果であると評価された。

ただし、問題点として次のような意見が出された。

第一部に関して、第二章三で主題的に論じられた久末淳については、従来ほとんど取り上げられなかった作家だけに貴重な新見が窺われると評価されたものの、第二章一で取り上げられた石川啄木については、特に取り上げる必要性そのものを疑問視する意見が出、また第一章の森鷗外「阿育王事蹟」については、鷗外の軍国主義批判という姿勢を単純に引き出せるのか、鷗外の戦争に対する態度はもう少し両義的なものだったのではないかという疑義が呈せられた。

この後者の疑義は、中勘助インド三部作の背景に見られるとされた戦乱とそれへの精神的対峙の構図が鷗外と通底するという終章での論及とも関わり、また中勘助のアジア太平洋戦争中発表の戦争詩の評価とも関わるため、このあたりのところはもう少し慎重に吟味し、議論を深化させることが望ましいのではないかという意見が出た。

第一部第二章については、さらに同時代の文学者と印度学・仏教学という観点から見るのであれば、倉田百三ほか視野に入れるべき文学者は他にもいるのではないかという意見が出た。

第二章三については、第一次大本教事件、白蓮事件を意識したと見るのはいささか牽強付会ではないかと説得力の欠如を指摘する意見があった。

他には、議論の対象となったインド三部作について、畢竟どのようなジャンル（サブジャンル）に属すると見ることができるのか、その独自性は何であるのかという点に踏み込んで欲しかったという意見が出た。

また、静岡市所蔵中勘助関係資料から中勘助が印度学資料・仏教学資料を相当読み込んだことは明らかながら、インド三部作との関係に限った場合、結局のところ小説・フィクションの素材にとどまるのか、精神的思想的な面も含めた受容になるのか、その点について必ずしも明確にされていないという疑問が呈せられた。

さらに、全体を通しての論述上の欠点として、引用等客観的言説を受けての論者自身の説明の言葉がやや不十分、舌足らずな例が散見することが指摘された。

また、論者が引用した文献資料や中勘助が参照した資料について、基本的な書誌的データの紹介にとどまり、資料の吟味や位置づけなどがやや不十分という意見が出た。

このような問題点があるにせよ、これらの指摘・疑問の多くは次なる目標として今後の追究が期待されるべきものであり、本論文これ自体が開拓した領域が広くまた深いこと、非常に価値あるものであることは動かない。

これまでの研究史において手薄だった中勘助の印度学・仏教学資料受容という点に着目して中勘助インド三部作の読みを更新しようと目指した本論文の狙いが基本的に成功していることは疑いようがない。

静岡市所蔵中勘助関係資料がまだ全面的な一般公開に至っていないという条件が、論者のこれまでの成果発表に一定のブレーキをかけていたとのことだが、今後は、著作権保護期間の終了（2016年1月1日）といった条件の変化も日程に上っており、本論文の達成に引き続き、広く日本近代文学史全般における印度学・仏教学受容という観点からの中勘助の位置づけへとさらに歩を進めることによって、論者が中勘助研究の進展に寄与すること、ひいては日本近代文学研究の進展に寄与することも大いに期待できる。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士論文としての水準に達していると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことをご報告する。